

## 急性中耳炎におけるプラナルカストの併用

濱 島 有 喜<sup>1)</sup>      渡 邊 暢 浩<sup>1)</sup>      村 上 信 五<sup>1)</sup>  
宮 本 直 哉<sup>2)</sup>      高 木 一 平<sup>3)</sup>

1) 名古屋市立大学耳鼻咽喉頭頸部外科

2) 宮本耳鼻咽喉科

3) 高木耳鼻咽喉科

**【はじめに】** 滲出性中耳炎は小児に散見される疾患であり、急性中耳炎の治癒過程に滲出性中耳炎に移行すると考えられており、急性中耳炎の約半数が滲出性中耳炎に移行するという報告もある。滲出性中耳炎は、知らず知らずのうちに難聴を呈し、言語発達や学校生活や、日常会話に支障をきたす可能性も否定できない。また滲出性中耳炎は、その治癒遷延や、反復罹患も、臨床上問題となる。急性中耳炎には細菌感染だけでなく、RSウイルスなどのウイルス感染の関与も問題となっており、RSウイルスには抗ロイコトリエン薬の有効性も報告されている。

そこで我々は、急性中耳炎の発症初期からプラナルカストを併用し、治癒期間の短縮や、滲出性中耳炎への移行を防ぐことが出来ないか、検討を行った。

**【方 法】** 名古屋市立大学耳鼻咽喉科および関連施設に来院した急性中耳炎患者に対し、プラナルカスト投与群と非投与群を無作為に振り分けた。初診時と治癒過程における鼓膜所見を急性中耳炎診療ガイドラインに従いスコア化し、ティンパノメトリーにて滲出性中耳炎の状態を評価した。

**【結果および考察】** プラナルカスト併用群では、非併用群に比較し、改善の割合が高かった。耳症状以外では、鼻閉、鼻汁、咳の改善が併用群で有意に高かった。また併用群は、急性中耳炎の遷延化を有意に抑制した。